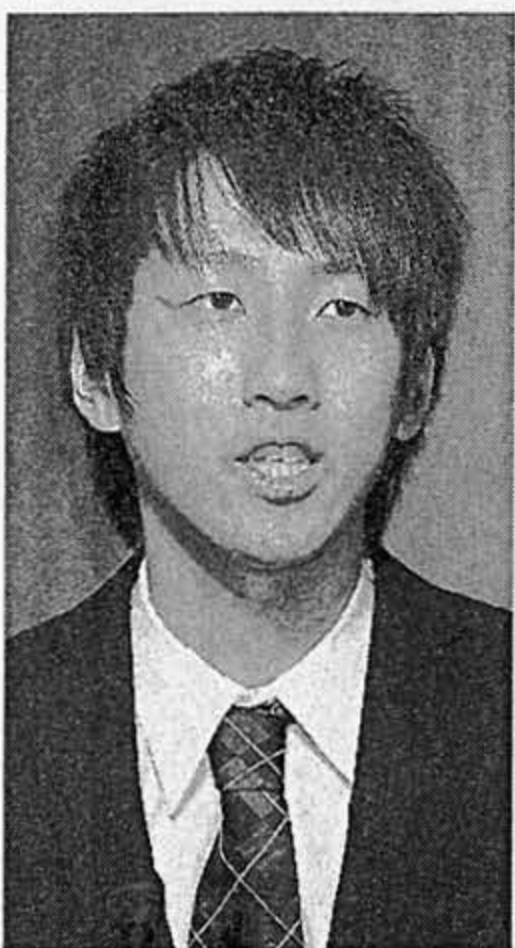


芥川賞・直木賞に決まって



あさい・りょう 1989年岐阜県生まれ。早稲田大卒。2009年に『桐島、部活やめるってよ』で小説すばる新人賞＝いずれも16日夜、山本裕之撮影

朝井リョウ「何者」

ノートの片隅、先生が赤ペンで走り書く文字は、ところどころ繋がっていたり、省略されたりして、小学生の私には少し読みづらかった。それでも私は必死に解読した。毎日欠かさず書いていた日記に、先生というたったひとりの読者がどんな「感想」をくれるのか、それが本当に楽しみだったのだ。一輪車に乗ったときのバランス感覚のゆがみ、二重とびの練習をしていたらできてしまったミミズバレのこと。特に事件の起こらない日常を、私はただただ綴り続けた。

「日記というよりも、まるで小説を読んでいるみたいです」

ある日、先生からそんな感想が返ってきたことがあった。その赤い文字が、頭の中から足の指までに染み渡っていった感覚を、私は今でもはっきりと覚えている。その文字だけをエンジンにして、原稿用紙百枚近くの小説を書いた。ただただ、自分の文章を先生に読んでもらいたかった。

幼い頃の大発見、もう一度

あれは、卒業式の日だったかもしれない。先生は、便箋三枚に及ぶ感想文を返してくれた。私は貪るようにその感想を読んだ。そして、何周目かで、気が付いた。

便箋の中では、どの文字も繋がっていない。どの文字も省略されていない。これは、自分ひとりだけのために向けられた文章なんだ、と。

私はこのとき、先生が、「先生と生徒」ではなく、ひとりの人間同士として、私と向き合ってくれたのだと思った。そして、それを可能にしたのは、文章であり、小説なのだ、と知った。

私の小説の原点はそこにある。私はいま、向き合いたい世界がたくさんある。向き合いたい人がたくさんいる。だから私は小説を書く。小学六年生のときのあの発見をもう一度追い求めるようにして、私はこれからも小説を書きつづけていくのだと思う。

「現代的で斬新」

直木賞は選考委員の北方謙三が経過を説明した。最初の投票で朝井、安部、西加奈子『ふくわらい』に絞られ、3度目の投票で2作受賞が決まった。『何者』は「現代をとらえた斬新な青春小説」、『等伯』は「綿密な調査で土台を作り、読みどころもある」と評価された。「新しい才能と完成した力量のぶつかり合い。比べようがない」としてどちらか1作に絞ることはやめ、ダブル受賞が妥当となったという。